

投句欄 自由律の泉 ⑩

- 1 元気かと娘のメール深夜の定期便 ちば つゆこ
- 2 粹を飛び出せぬ筆 柳泉洞
- 3 向き合えば微妙にゆれるぼくの距離計 田辺まさゆき
- 4 初雪が睫毛につもった 和寄 はると
- 5 読経の中鱗が剥がれてゆく 原 さつき
- 6 親子のキヤッチボール普通の日々をとりもどす 金澤ひろあき
- 7 静かさ咲きいでる寒燈に アカホリ フキ
- 8 今が仮の世ではないかとふと思う冬の夜 久光 良一
- 9 全部紙クズだった抽選券 無 一
- 10 一日誰も来ない枯野行く救急車のサイレン 小山 榮康
- 11 鈴蘭灯のある少年のかたち 野谷 真治
- 12 涙の量だけいつも心が軽くなる 明日原 夏斗
- 13 バンクシーもクシヤミ ワクチンが間に合わない 白松 いちろう
- 14 ものがたり ゆっくりとじて 春の服 中島 雲舟
- 15 いつもと違うハートビートで逢っている 部屋 慈音
- 16 ビール注ぐ 無 大岳 次郎
- 17 齒裏逃げ回る朝食の粒納豆 佐瀬 広隆
- 18 窓ほそく開けて冬のほそい風 佐川 智英実
- 19 普通で生きるありがたさ感じつつ 田中 美太
- 20 切り取った時空に点けた朱い染み ひとつ 檜 幽可
- 21 凍つく星は爺の零す涙粒 植田 博
- 22 さまざまな顔して雲が泣きだす 富永 鳩山

23 悲しみ重ねし約束も唇気楼 荻島 架人

24 空箱重ねて入れるものがない 平岡 久美子

25 雑用の雑に名前つけて肯定したい日 富永 順子

26 足裏のぷくぷくたんぽぽの綿毛 黒瀬 文子

27 灰白い朝月夜に舞う黄砂 江藤 霧鳴

28 今朝も黄身から崩すいつもの死亡記事

さいとう こう

29 風につまづく 消えてしまったゆびきり

井尾 良子

● 泉 ⑨ より 一句鑑賞

母というたった一文字まるい月 棚橋 麗未

▼母と読み、母と書くこの一文字に愛し愛された人生の幸福が丸い月の優しさ、温かさにも似ていつも愛おしい……と読みました。(部屋 慈音)

▼母が亡くなって、今年9年になる。母という言葉の中には、人それぞれの思いがあるだろう。「まるい月」が印象的である。(野谷 真治)

▼「母」という字の優しさに「まるい月」が加わり、一層優しい句になっています。私自身を優しい母かと問うたら、???が三つ位つきますが、亡き母を思う時、やはり、優しい時の母ばかりが思い出されます。(ちば つゆこ)

▼小さな心の房が大福餅であふれ、満腹感を得た思いです。草を食み小石を舐めて飢えを凌いだ少年の日を想う。あー妣よ。(植田 博)

▼私の母も、今は月で、父と二人でいるようです。月の丸さと母の一文字、全くお見事です。私もこのくらい詠めたら良いと思っっているのですが。(田中 美太)

鶏だったら殺処分 豚だったら殺処分 富永 順子

▼鶏、豚、牛などに疫病が発生すると間髪をおかず殺処分がはじまる。感染防止のためとは言え、その容赦ない処分の有様を見ていると心が痛む。コロナ発生という現状を迎えた

今、そのことを思い出さずにはいられない。

(久光 良二)

▼良いですね、「鶏だったら殺処分 豚だったら殺処分 人間だったら？」選別放置も処分のひとつ、いずれそうなる、と云うか、既になっていますね。

(檜 幽可)

夜の端無口の傘の影

野谷 真治

▼静謐で陰影に富んだ情景が、鮮やかに浮かびます。「夜の端」「無口の傘」という表現が秀逸だと思います。

(明日原 夏斗)

▼夜、家の中、傘が立てかけてある。その影を見ていて、強く「ひとり」を感じてしまう。描かれているのは傘の影だが、それを見ている人の状況や表情までもが思い浮かぶ。描かれなかったものの深さを感じる。

(金澤ひろあき)

▼夜の端という表現がとても新鮮で心地良い。傘は自分自身なのだろうか。それも影となつては、頼りなくて今にも消えてしまいそうで孤独を感じる。

(原 さつき)

お休みとしか言わない夫婦の満月

平岡 久美子

▼それだけの会話で一日を終える。それで十分という事なのか。月が満ちている所の意味を想像させる。満ち足りているのか、欠けていく手前なのか、一人で感傷にひたるのか、共に見つめているのか。

(柳 泉洞)

▼一日に一言しか会話をすることのないこの夫婦は何を意味しているのだろうか。冷え切った境界か、はたまたたった一言でも通じ合っている絆か。読み手へ委ねる印象の幅広さ

に感嘆。満ち欠けすることから「願望」や生と死の象徴とされる月と重ねられた夫婦像、毒となるか薬となるか。

(江藤 霧鳴)

▼「言わない」という表現の中に、「言えない」という弱さや寂しさの表現とは違った、前向きな生きる姿勢を感じさせられました。また、そこに満月を配したところに凛々しさを感ぜさせられました。みごとな生き方です。

(大岳 次郎)

▼お休みだけの一言でも一日の感謝の表れと思う。変化のない毎日かもしれない、一緒に月を見ている訳でもない。欠けた月もいいが、満月のような一日を幸と思ひ明日もまた願っているのだろう。

(荻島 架人)

かみ合わない話の明日天気になあれ

ちば つゆこ

▼コロナ対策では言っていることとやることがサッパリ噛み合っていない。国民は明日の天気 to 助けを求めることしかないのだろうか。

(白松 いちろう)

▼今、話が合わなくても明日の天気次第で話が合うかもしれないなんて、人ってわりかし気まぐれな生き物かも知れない。

(中島 雲舟)

くずれゆくもののマスクの内顔

富永 鳩山

▼鬱陶しい日々が続く、マスクの内なる顔を思うとき虚しさを感じる。深くて重厚な句と思う。

(小山 榮康)

デジタル化ついていけないスマホ難民

和寄 はると

▼私も、置いてきぼりの身です。ネットとも無縁です。そ

れでも、生きていけるものです。(無 一)

GOTOトラベル 神にでもなつたか 檜 幽可

▼昨年の暮れに義妹の病気見舞いをGOTOトラベルに便乗して四泊五日の旅を計画しました。二人の義妹達、長男家族との食事会や土産代にプレミアム商品券を気兼ねなく使わせていただきました。リッチな旅でした。(和寄 はると)

このままでいいのこのままでいい 明日原 夏斗

▼このような焦燥はとてよくわかります。自分なりに生きていくつもりでも、繰り返し突き上げる思い。最後の「いて」がよいと思います。現在から未来へつづく自己の存在感のようなものが立ちあがってきます。(田辺 まさゆき)

燃えるごみ燃えないごみもあなたしだい 中島 雲舟

▼普段、機械的にゴミの分別を行っているので、あまり意識したことはありませんが、「あなたしだい」という言葉がドキッとしました。(アカホリ フキ)

透き通る青の中の孤独 荻島 架人

▼冬でも天気の良い日は透き通るような青空に出会う、いつもなら誰かときれいなネ、ワーとか声を出して喜び合える、今はそれさえも出来ない、なんと淋しいことか。

(井尾 良子)

天才でなくてよかった日暮の唐がらし 井尾 良子

▼本当にそうですね、天才って百万人に一人くらい？ よかったよかったと、唐がらしはゆれているのでしょうか、ユモアの中に人の本質がきっちり詠われていると思います。(平岡 久美子)

● 係より

次回も、皆様の作品一句と、今回の作品の感想をお寄せください。左記宛て、同封の緑の投句用紙、またはメールにて。

＜送り先＞ 〒193-0832 八王子市散田町2-58-4

平岡久美子

メール kumiko801@wh-wing.net

＜締め切り＞ 2021年5月末日

★「自由律の泉」にご投稿いただいた句や感想は、原則的に自由律俳句協会の公式ツイッターでも紹介させていただきます。ツイッターでの紹介を希望されない方は、投句の際にその旨をお知らせください(投句用紙にチェック欄があります)。

自由律の泉賞 投句募集

同封の専用投句用紙、またはメールにて、作品一句をお寄せください。参加者全員による互選で賞を決めます(ニュースレターNo.14に詳しい募集案内を掲載しています)。

これまで「自由律の泉」に投句されたことのない方も歓迎です。皆さまのご参加をお待ちしています。